



和歌山市 文化財総合調査報告(2)



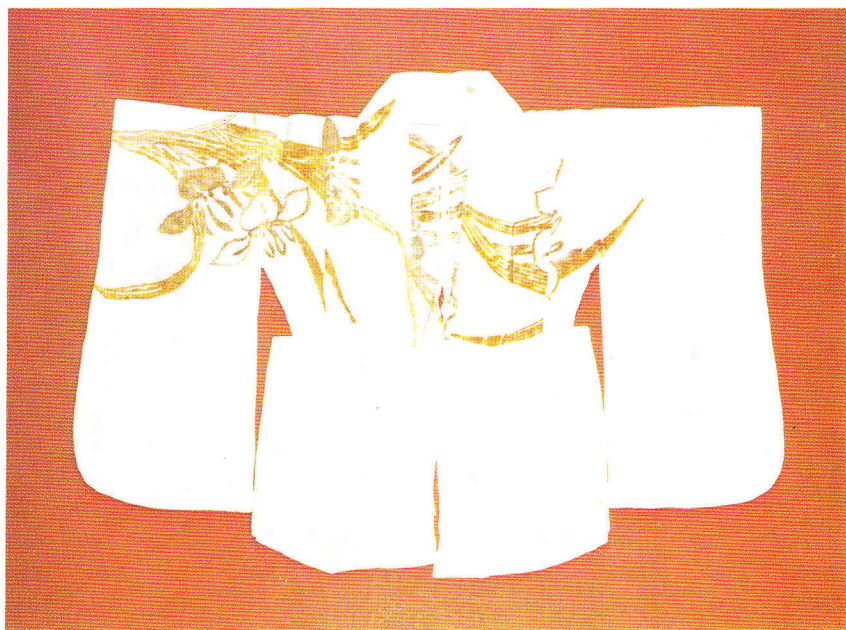
1979

和歌山市教育委員会

表紙カット・加太(伝・伽陀寺跡)出土
梵字文軒丸瓦 径17cm
(伊喜利良信氏 資料)



淡島神社 奉納人形衣装(左右41cm)



淡島神社 奉納人形衣装(左右38cm)

はじめに

和歌山市では、昨年『和歌山市文化財総合調査報告(1)』を刊行しました。これは、従来おこなわれているひとつの研究分野ごとの報告書という形態をとらず、一定地域における各種の幅広い文化財資料をまとめたもので、幸いにも各方面から評価をいただいています。

今回、調査を担当された諸先生方のご努力によって、その続編を上梓する運びとなりました。本書が、前書とともに和歌山市の郷土文化の理解と研究に役立つことを念じてやみません。

昭和五十四年三月

和歌山市長

宇治田 省三

出版に際して

文化財総合調査は、国・県・市の文化財として指定されていない各種の文化財の実態を調査し、指定文化財と比べて遜色のないものを掘り起すことを主眼としておこないましたが、調査にあたられた諸先生方のご熱意により、所期の目的を達することができたと思います。

今後、これらの文化財を指定等の処置によって保護・顕彰してゆくことが、私共教育委員会に残された課題であります。

本書の出版にあたり、調査にこころよく御協力くださった文化財管理者の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和五十四年三月

和歌山市教育委員会

例 言

一、本書は、昭和四十九年度から昭和五十一年度の三カ年度にわたっておこなった文化財総合調査のうち、昭和五十・五十一年度の調査に関する記録である。

一、同年度の調査は、和歌山市北部・中部地域の文化財（史跡・埋蔵文化財・建造物・古文書・植物）のうち、各種の指定を受けていないものについておこなった。

一、調査は和歌山市教育委員会の委嘱により、左記の調査担当者がおこなった。

田 中 敬 忠（木国文化財協会会長）

蘭 田 香 融（関西大学文学部教授）

宮 田 啓 二（和歌山市史編さん委員）

松 田 茂 樹（日本建築学会特別会員）

三 尾 功（和歌山市教育委員会主幹指導主事）

中 村 正 寿（和歌山県生物同好会会長）

一、収録した写真は、調査担当者の撮影によるもののほかに、社会教育課（池本・木村・大野）で撮影したものを含む。

一、製図は、調査担当者の指示のもとに社会教育課文化財係（大野）でおこなった。

一、本書に掲載した地図は、主として和歌山市都市計画図を用いた。

一、調査事務局および調査協力者は左記のとおりである。

事 務 局

（昭和五十年調査）

稲 垣 優（教育長）

坂 田 栄 一（社会教育課長）

岩 橋 世 始（社会教育課文化係長）

高 垣 正 人（社会教育課主事）

(昭和五十一年度調査)

稲垣 優 (教育長)

坂田 栄一 (社会教育課長)

芝本 弘雄 (社会教育課文化財係長)

池本 正之 (社会教育課主任)

高垣 正人 (社会教育課主事)

大野 左千夫 (社会教育課非常勤嘱託)

(報告書作成)

稲垣 優 (教育長)

児嶋 義一 (社会教育課長)

芝本 弘雄 (社会教育課文化財係長)

木村 哲文 (社会教育課主任)

大野 左千夫 (社会教育課技師)

調査協力者 (敬称略・順不同)

淡島神社・大同寺・了法寺・西岸寺・日前宮・竈山神社・丹生神社・木本八幡宮・矢の宮神社・武内神社・全正寺・蓮乗寺・大畑修・吉備慶三郎・伊喜利良信・中野 清・和田信彦・紀 俊嗣・紀 俊武・山口正三・林 久堅・山本巖郎

目次

西岸寺の板碑（安藤彦四郎の墓）

蘭田香融……………1

和歌山市北部における歴史的建造物

松田茂樹……………9

城北・加太・有功地区の遺跡および遺物

宮田啓二……………28

了法寺所蔵日蓮自筆遺文について

三尾 功……………38

和歌山市中・北部の社叢

中村正寿……………46

和歌山市の石造物（二）

田中敬忠……………82

図版目次

図版第一	西岸寺板碑	(1)側面 (2)正面 (3)裏面(部分) (4)正面(部分)
図版第二	西岸寺板碑	(1)板碑台石と水鉢 (2)西岸寺無縁塔 (3)安藤彦四郎念持仏
図版第三	友ヶ島灯台	(1)灯台と旧官舎 (2)旧官舎 (3)旧官舎(部分)
図版第四	淡島神社	(1)拝殿 (2)本殿(側面) (3)陣屋表門
図版第五	淡島神社	(1)陣屋表門(部分) (2)客殿玄関 (3)書院内部
図版第六	大同寺握り仏	(1)握り仏(約4/5大) (2)握仏
図版第七	淡島神社滑石製玉類	(1)滑石製勾玉 (2)滑石製管玉 (3)滑石製小玉
図版第八	了法寺日蓮遺文	(1)さしきの女房御返事 (2)同裏書
図版第九	了法寺日蓮遺文	(1)日蓮自筆遺文断簡 (2)同裏書
図版第一〇	了法寺日蓮遺文	(1)伯耆殿并諸人御中御返事(断簡) (2)同裏書
図版第一一	和歌山の石造物	(1)石灯籠① (2)石灯籠② (3)武内宿祢誕生井④ (4)道標⑤
図版第一二	和歌山の石造物	(1)武内宿祢誕生所碑 (2)同裏面(部分) (3)静火社旧地碑⑨ (4)菖蒲井⑬ (5)菖蒲井(部分)
図版第一三	和歌山の石造物	(1)地蔵の辻②⑩ (2)徳勒津宮遺址碑②⑪ (3)宝篋印塔③⑩ (4)笠石塔②⑩
図版第一四	和歌山の石造物	(1)庚申碑(右から10・11・12・13・14・15・16・17) (2)庚申碑⑩
図版第一五	和歌山の石造物	(1)庚申碑⑪ (2)庚申碑⑫
図版第一六	和歌山の石造物	(1)庚申碑⑬ (2)庚申碑⑭ (2)庚申碑(16右と17左)
図版第一七	和歌山の石造物	(1)道標⑭ (2)手水鉢⑭ (3)香炉⑭ (4)地蔵⑭
図版第一八	和歌山の石造物	(1)祇園南海墓碑⑭ (2)正清院火葬跡碑⑭ (3)畔田翠山墓碑⑭ (4)李真栄墓碑⑭ (5)李梅溪墓碑⑭ (6)李梅溪母墓碑⑭

挿 図 目 次

図版第一九	和歌山の石造物	(1) 本居大平墓碑 ③⑧	(2) 本居大平墓碑 ③⑨	(3) 本居建正墓碑 ④⑩	(4) 本居永平墓碑 ④②
図版第二〇	和歌山の石造物	(1) 本居都至子墓碑 ④③	(2) 本居布地子墓碑 ④④	(3) 本居雪子墓碑 ④⑤	(4) 本居家先祖親族墓遙拝所碑 ④⑥
図版第二一	和歌山の石造物	(1) 手水鉢 ④⑨	(2) 鬼勝墓碑 ④⑧	(3) 上辻邦彦墓碑 ⑤①	
図版第二二	和歌山の石造物	(1) 水野重仲墓碑 ⑤①	(2) 鈴木孫一墓碑 ⑤②	(3) 紀泉国境碑 ⑤③	(4) 仁井田好古墓碑 ⑤④
図版第二三	和歌山の石造物	(1) 塊亭句碑 ⑤⑥	(2) 芭蕉句碑 ⑥⑩	(3) 京山恭安斎碑 ⑥①	(4) 京山恭安斎墓碑 ⑥②
	(部分)	(7) 板碑 ⑤⑧			(5) 一石五輪塔 ⑤⑨
					(6) 一石五輪塔
図版第二四	和歌山の石造物	(1) 鈴木孫一墓碑 ⑥③	(2) 野際白雪墓碑 ⑥④	(3) 和田正主墓碑 ⑥⑥	(4) 荒川景元墓碑 ⑥⑤
図版第二五	和歌山の石造物	(1) 道標 ⑥⑦	(2) 道標 ⑥⑧	(3) 手水鉢 ⑦①	(4) 手水鉢 ⑦②
図版第二六	和歌山の石造物	(1) 力石 ⑦③	(2) 正清院墓碑 ⑦⑦	(3) 石灯籠 ⑦④	(4) 手水鉢 ⑦⑤
図版第二七	和歌山の石造物	(1) 安藤直次墓碑 ⑦⑨	(2) 石製狛犬 ⑦⑥	(5) 御用井戸 ⑦⑧	
図 1	西岸寺の板碑略図(約50分の1)				
図 2	友ヶ島灯台の位置				
図 3	灯台各階平面図				
図 4	灯台敷地平面図(約400分の1)				
図 5	旧灯台官舎平面図				
図 6	淡島神社の位置				
図 7	社殿平面図				
図 8	客殿平面図				
図 9	山口御殿の位置				

図 30	玉垣内塚上の木立……………	48
図 29	社殿西側の樹林……………	48
図 28	社殿東側傾斜地の樹木分布図……………	47
図 27	社殿東側の樹林……………	47
図 26	彦五瀬命墓……………	47
図 25	彦五瀬命墓と竈山神社境内(600分の1)……………	47
図 24	社叢の位置(1・竈山神社 2・日前宮 3・丹生神社 4・木本八幡宮)……………	46
図 23	さしきの女房御返事裏書(部分)……………	41
図 22	了法寺の位置……………	38
図 21	平の谷遺跡出土遺物……………	35
図 20	城北地区出土遺物……………	33
図 19	城北地区出土遺物……………	32
図 18	城北地区出土遺物……………	31
図 17	城北地区遺物出土地点……………	30
図 16	城北地区出土の叩き石など……………	30
図 15	遺跡の位置(1・城北遺跡2・大同寺3・平の谷遺跡)……………	28
図 14	旧山口御殿付近の現況……………	26
図 13	山口御殿平面図……………	25
図 12	山口小学校にのこされた石橋……………	24
図 11	宝暦七年聖護院門跡入部日程……………	19
図 10	山口喜内の墓碑(遍照寺)……………	18

図 51	丹生神社社叢の植物	81
図 50	丹生神社境内樹林	75
図 49	調査区域図	75
図 48	丹生神社社叢	74
図 47	丹生神社と馬場栗栖	74
図 46	丹生神社の位置	73
図 45	ホルトノキの大本	67
図 44	木ノ本八幡宮境内の樹林	67
図 43	木ノ本八幡宮の社叢(南から)	66
図 42	木ノ本八幡宮飛地境内	66
図 41	木ノ本八幡宮参道の木立	66
図 40	木ノ本八幡宮付近の地形	66
図 39	木ノ本八幡宮の位置	65
図 38	日前国懸神宮社叢の植物	64
図 37	日前国懸神宮社叢の植物	63
図 36	日前宮境内平面図	57
図 35	竈山神社社叢の植物	56
図 34	竈山神社社叢の植物	55
図 33	境内地樹木(帯状)分布図	49
図 32	玉塚内塚上の樹木分布図	48
図 31	玉垣内の木立	48

木ノ本八幡宮の社叢（東から）.....	81
和歌浦天満宮 灯籠の配置.....	110
安藤家墓地の墓碑配置図.....	120

城北・加太・有功地区の遺跡および遺物

宮田 啓 二

城北地区の出土資料

人家の建てこんだ今日では、旧市街地の考古学資料の収集はほとんど不可能にちかい状態である。和歌川以南の地域では、さきに『和歌山市文化財総合調査報告(1)』に記載した関戸周辺がひとつの海浜生活濫觴の地であり、これに対応するに、今ひとつ北では、鷺ノ森を中心とする城北地区がある。古墳時代には、岡公園付近から東南にのびる砂丘北麓地域である。後者は古墳であるが、関戸古墳よりは一世紀ばかりおくれた七世紀前半に位置づけられる。

一般的通念的な推論として、周辺の大規模な遺跡、たとえば太田黒田遺跡から一連の日前宮周辺の弥生時代の遺跡、南では南神前・井辺遺跡と、周辺をとりまかれた弥生農耕社会の終りごろ、ひとつの職業分化の形で、陸化した海浜の適地に漁撈・製塩等の生活の場をもとめたのが関戸遺跡であり、北では城北遺跡ということになる。製塩は顕著な物証をもたないからどうかと思うが、海へ脚をいれた生活の場であることに相異なる。

1 城北遺跡 具体的には、京橋と寄合橋を北に見通した線内をほぼ中心とする地域であつて、鷺ノ森周辺が分布が密であるから、これまで「鷺ノ森遺跡」と呼ばれてきた。

この辺は、ふるく宇治と総称された地域である。『日本書紀』などの古い文献にも「菟道」のことばがみえ、古代末・中世には「紀伊湊」として北寄りの接岸地域には、河海の物資集散の要津となり、更に、三日市・六日市・七日市等の商賈群聚の地に発展し、町の歴史ももっとも古く、現在に及んでいる地域である。

第二次世界大戦後の復興途上にあつた昭和二三年頃から、吉備慶三郎氏が水道工事・道路工事等のあとを追って、城北地区に各時代にわたる遺物を発見され、その資料を現在も一括して保存されている。今となつては得がたい市街地資料である。もちろん準備された発掘調査でな



図15 遺跡の位置
(1・城北遺跡、2・大同寺、3・平の谷遺跡)

いから、検討を要する点も多いであろうが、大きくこれらの遺物と出土地点を総合して、早く人の居住を促した砂堆の地であることがわかり、市街地の母体と海浜地形を知る上に役立つとおもう。吉備氏には厚くその労を感謝申し上げ、資料の一部であるが収録させていただく。

(遺物出土地点・図17)

① ト半町・板屋町の電話線架設工事の際に出土した。表土約九〇センチが瓦を含んだ砂礫層、その下約九〇センチ粘土、以下土器包含層。塩壺・土鍾・土師器片・須恵器片(杯・高杯・壺)。

② 鷺ノ森 元豊通宝(二枚)・シジミ・ウミニナ・ホラ・ホタテ貝・サルボウ・クルミ・カシ。九軒丁なら鷺ノ森別院東側道路にかけて土器の分布が密である。土師器・須恵器。

③ 城北小学校北側 鷺ノ森別院の間に窯跡五基。窯内に砂充滿、用途不明。

④ 朝棕神社 須恵器高杯脚部。神社北側の道を隔てて西釘貫町二丁目では、弥生時代後期の土器片が出土しているが、それより西北約一六〇メートルのところは、地下一二〇センチで無遺物の砂層となる。

⑤ 西大工町 土師質小皿・土師器破片 専光寺東側の道路交差点の地下一二〇センチで、サルボウの貝層(厚さ約三〇センチ)が二・七メートル程度続いていた。土師器片採集。

⑥ 北大工町 土師器片。

⑦ 東釘貫丁二丁目 弥生武土器片(後期)・土師器片・須恵器片。

⑧ 教仙橋西詣西側 須恵器杯破片。

⑨ 博労丁(城北小学校西) 叩き石。

⑩ 旅籠町 須恵器。

⑪ 山吹町 弥生武土器(後期)底部。

なお、城北遺跡(鷺ノ森遺跡)については、『あさも』2巻5号に吉備氏によって一部紹介されている(「紀北古文化への一考察」)が、何分共謄写刷で少数部発行したものであるから、今回、吉備氏の了解を得てここに記載した。

2 岡ノ宮古墳

この古墳は、刺田彦神社(岡ノ宮)境内砂丘麓にあったが、今は全く埋没している。古墳が検出された際の事情は『和歌



図16 城北地区出土の叩き石など

山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』第一輯に記載されている(岩西忠一「岡ノ宮古墳」)。その概要は『和歌山市要』(二六一頁)にある。これによると、二七〇×一八〇×高さ一〇八センチ程度の石室(堅穴式?)で、須恵器・土師器が副葬されていた。時期は、須恵器の型式からみると七世紀初頭と考えられる。

なお、岡の宮古墳の東南にある車坂を、明治末年に、手平変電所敷地造成工事のため土砂採取中に、古墳が検出されたというが、遺物・遺構は詳細でない。

以上、城北地区は一応弥生時代後期ごろから古墳時代にかけて、鷺ノ森砂洲の陸化とともに海浜生活を営むに好条件の環境を与え、土錘・

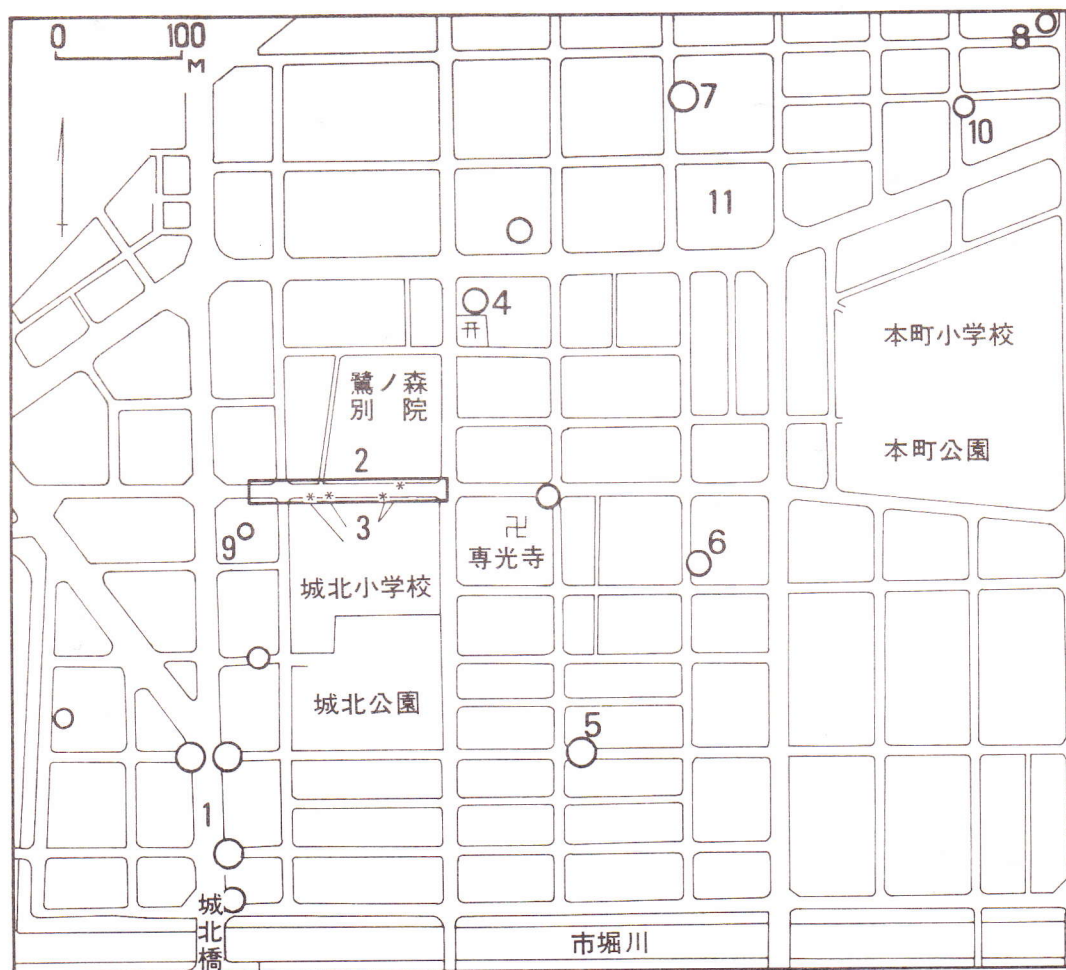


図17 城北地区遺物出土地点

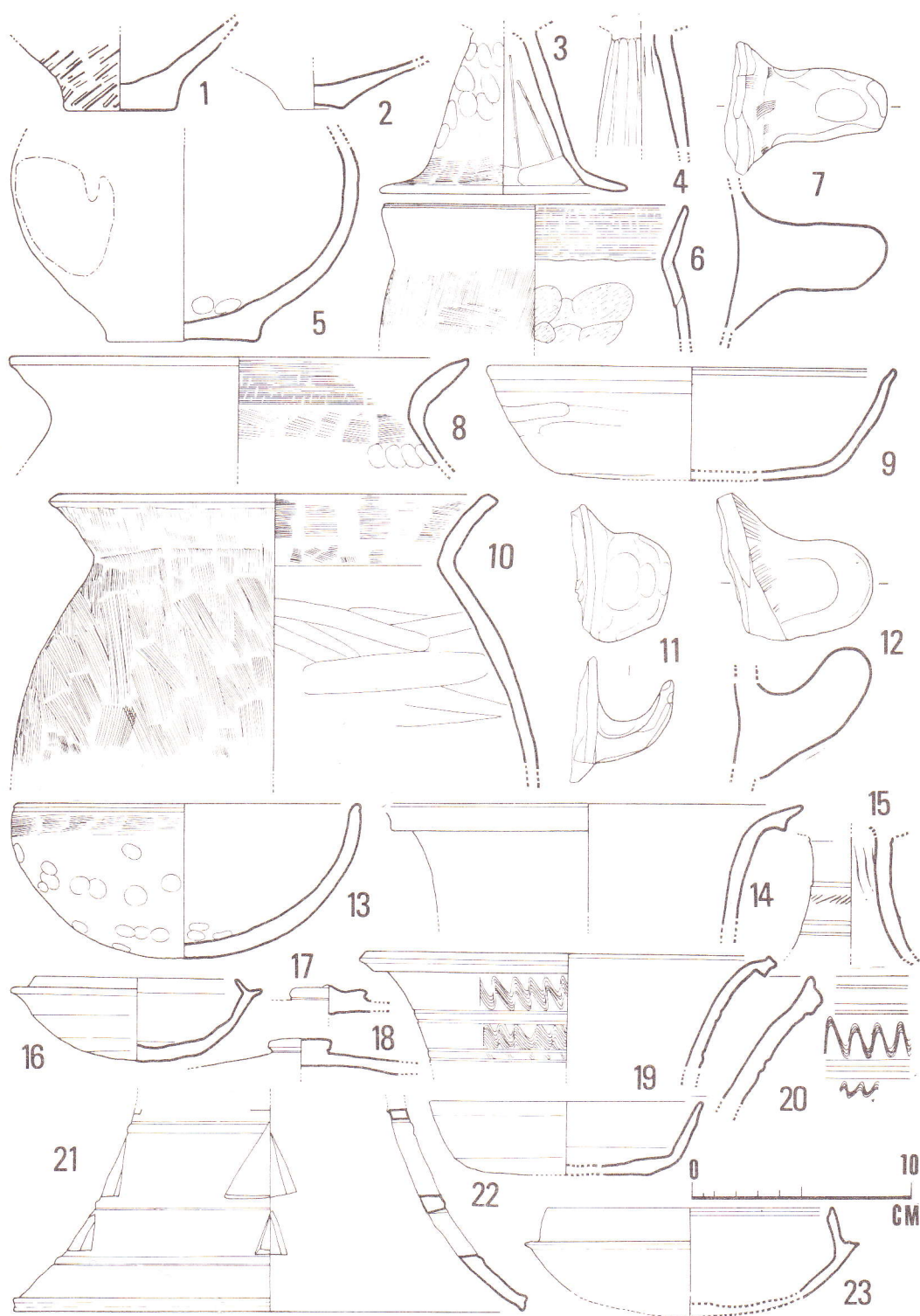


图18 城北地区出土遗物

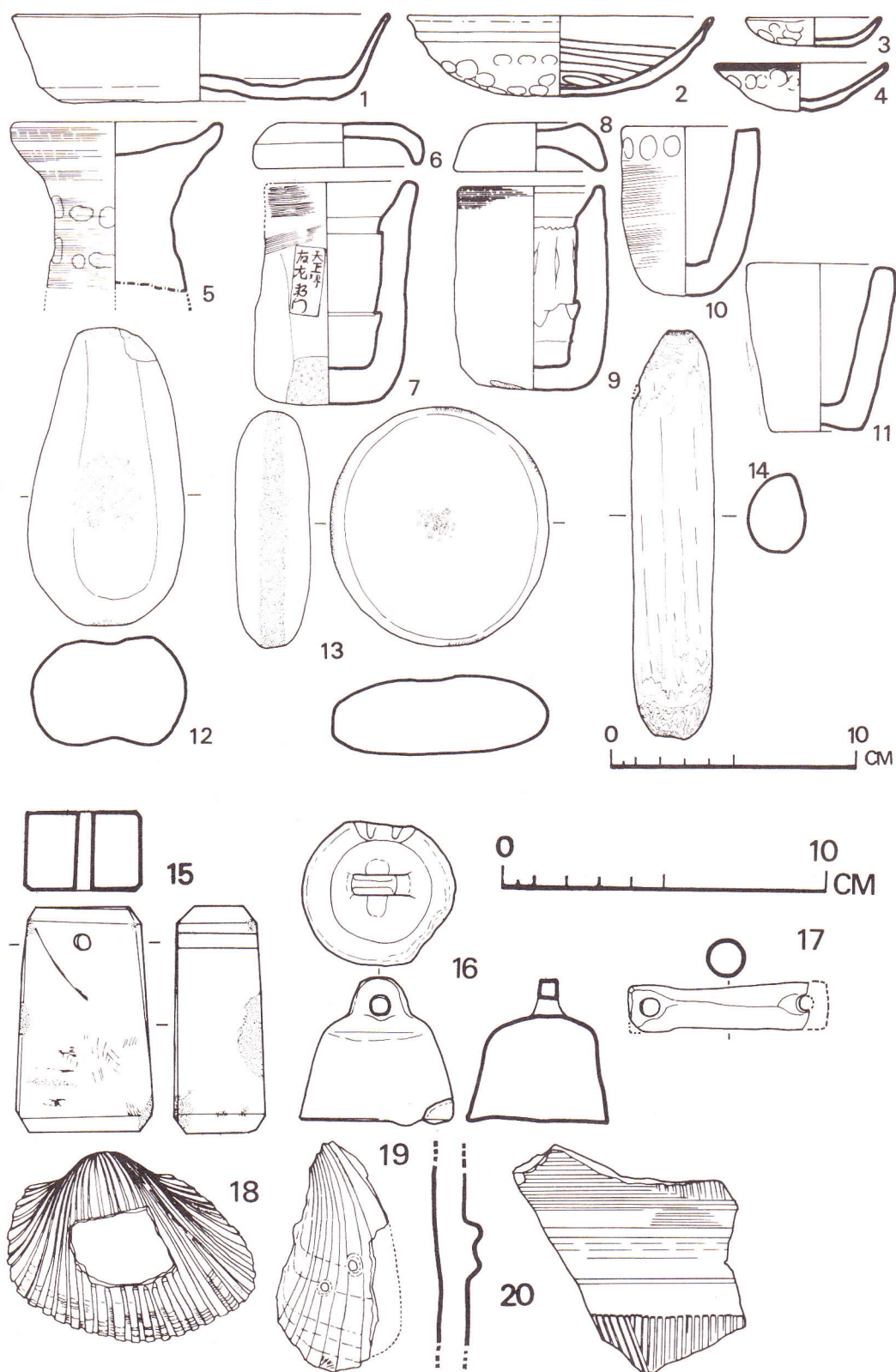


图19 城北地区出土遗物

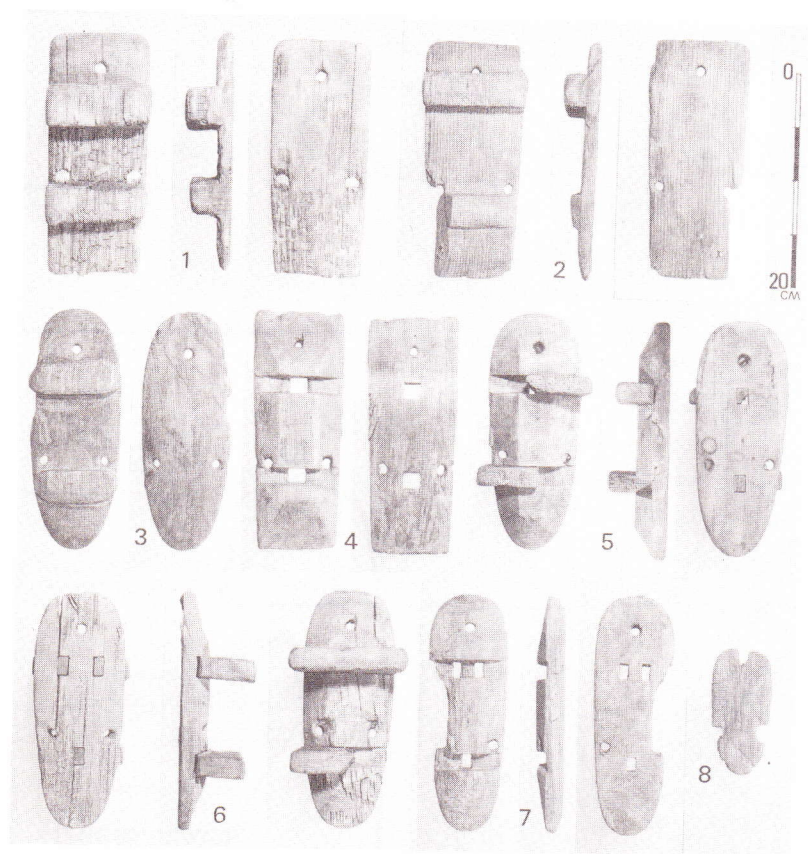
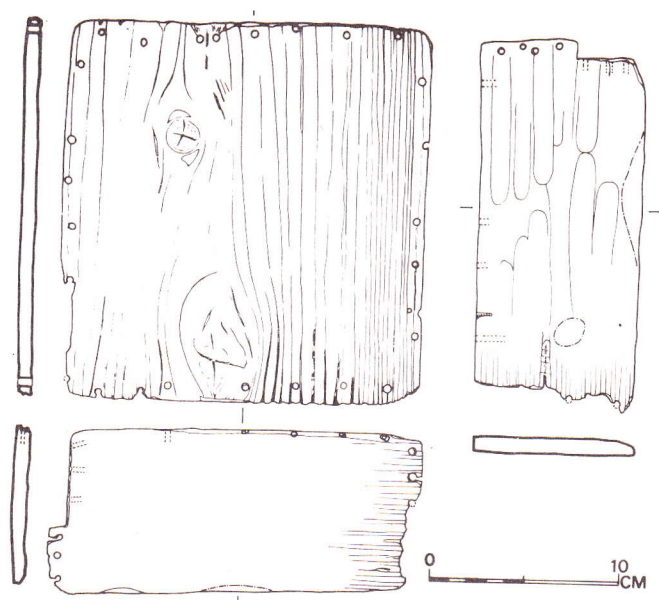


图20 城北地区出土遗物

No.	遺 物 名	胎 土	焼 成	色 調 整	形	出 土 地 (第 図)	備 考
図18-1	弥生式土器	良	並	赤みを帯びた黄褐色	外面タタキ	山吹町(11)	
2	土 師 器	2～3mmの砂粒少量	並	淡 黄 灰 色		板屋町(1)	器壁荒れあり
3	"	並	やや軟	赤 褐 色	脚下端外面ハケ内面ヘラ	鷺ノ森(2)	
4	"	やや砂質	並	淡 赤 褐 色	外面ヘラミガキ	"	
5	弥生式土器	1～3mmの長石粒を多量	やや軟	黄 灰 色		本町公園	器壁荒れあり
6	土 師 器	微細砂粒若干	並	淡 赤 褐 色	脚端面口部内面ハケ内面ヘラ削り	板屋町(1)	
7	"	並	並	淡 赤 褐 色	粗 い ハ ケ	鷺ノ森(2)	
8	"	砂 質	軟	黄 灰 色	内面ハケ、口部外面ナデ	"	
9	"	やや砂質	やや軟	明るい赤褐色	口 部 ナ デ	"	全体にやや磨耗
10	"	並	並	赤 褐 色	外面ハケ、内面ヘラ	城北橋北詰(1南)	胎土に微量の雲母
11	"	1～2mmの砂粒若干	軟	赤みを帯びた黄褐色		鷺ノ森(2)	
12	"	やや砂質	やや軟	淡 赤 褐 色	粗 い ハ ケ	ト半町(1)	
13	"	砂 質	軟	灰 白 色	指 頭 痕	鷺ノ森(2)	器壁荒れあり
14	須恵器	良	良	灰 色	ナ デ	ト半町(2)	
15	"	並	並	暗 灰 色	ナデ、内面シボリ目	朝椋社(4)	
16	"	良	優	灰 色	ナ デ	鷺ノ森(2)	ロクロ時計回り、底部に植物性跡
17	"	並	並	灰 色		"	
18	"	並	軟	灰 白 色		ト半町(1)	
19	"	長石粒若干含む	良	灰 色	内 面 ナ デ	"	櫛目のあとに沈線
20	"	並	良	灰 色	内 面 ナ デ	専光寺東側(2の東方)	復元径約40cm、櫛6本
21	"	並	良	暗 灰 色	内 面 ナ デ	鷺ノ森(2)	脚孔三角形四方向直列(残部)
22	"	並	並	灰 色	ナ デ	専光寺東側(2の東方)	
23	"	良	良	灰 色	ナ デ	鷺ノ森(2)	口部の約1/2
図19-1	"	良	良	灰 色	ナ デ	"	ロクロ時計回り焼きひずみあり
2	瓦 器	良	良	灰 色	口部ナデ、体面外面指痕	城北橋北詰(1の南)	暗文渦文
3	土師質土器	良	並	黄 灰 色		鷺ノ森(2)	
4	"	良	良	淡 黄 灰 色	ナ デ	"	
5	"	良	並	暗 黄 灰 色	ナ デ	西鍛鍛屋町(1と2の間)	上面にスス付着
6	"	良	並	黄 灰 色	ナ デ	権賀町	
7	"(塩壺)	細砂粒少量含む	良	淡 赤 褐 色	口部ナデ、内面底部布痕	鷺ノ森(2)	胎土に微量の雲母
8	"	良	良	赤みを帯びた黄褐色	外面ナデ、内面布痕	"	
9	"(塩壺)	細 砂 粒 若 干	良	淡 赤 褐 色	口部ナデ、内面シボリ目	"	底部砂粒状の小凹凸
10	"	砂 質	並	淡 赤 褐 色	外 面 ハ ケ ?	"	塩壺?
11	"	砂 質	並	灰 白 色	内 面 布 痕	"	塩壺?
12	叩 石	砂 岩	両端に叩打痕、凹石としても使用(両面)			鷺ノ森(2)	
13	"	砂 岩	外縁全面に叩打痕、凹石としても使用(両面)			"	
14	"	結 晶 片 岩	両端に叩打痕			"	
図19-15	石 製 鍾	土師質、胎土やや砂質、焼成軟、灰白色				本町公園	160 g
16	鉄 製 鍾					"	265 g
17	棒 状 土 鍾					鷺ノ森(2)	(10.5) g
18	有孔貝製品					"	
19	"					"	
20	円筒埴輪	須恵質、胎土良、粗いハケ	1～3mmの長石粒を多量に含む			"	
図20	木 製 容 器	竹釘使用、部分的な焼痕あり、				権賀町	内積約2603cc
"	下 駄	連歯下駄および露卯下駄				鷺ノ森(2)	

表1 城北地区出土遺物一覧

サルボウ等に依って大体生活の輪画が得られ、関戸遺跡とほぼ時期を重ねて、はじめは漁撈生活者のごく少数がすみついたものであろう。新堀川以東畑屋敷方面の新北地域は、細砂の深層である。遺物は発見されていない。南の湊地区も同様である。

加太・平の谷遺跡

淡島神社を南に廻った田倉海岸のほぼ中央部（淡島神社より約五〇〇メートル南側）、平の谷の入口南側の丘尾稜端にあった老松が台風で倒れたとき、根株跡に直径三メートル、深さ一メートルばかりの大きな穴があいた。

そのあとはずでに攪乱されていたが、出土した遺物をあつめて、一応図示した（図21）。

この地点は、海岸道路に沿う数メートルの低い尾稜端である。道路下の海岸は、波状の岩礁が連続する。満潮時には、二〇メートルばかり道路下に砂浜を残すだけになる。この地点から背後に狭い谷が斜めに奥深く入っており、池に尽きる。もとは池がかりの山田で、風波をさけるためには絶好の谷間である。現在は入口に一軒民家がある。

遺物は倒伏した松の根土に固く入っており、若干の木炭片が混り、攢鉢状になった穴の底や側面には地山のもろい岩の破片が散乱して、一部焼変をおもわせるものもあるが、確かでない。図示した石器が混在しているが、付近の岩とは石質が異なる。製塩土器は、やや尖底気味の丸底をもつもので、古墳時代後葉に位置づけられるものが多い。図21の7は奈良時代のものであろう。

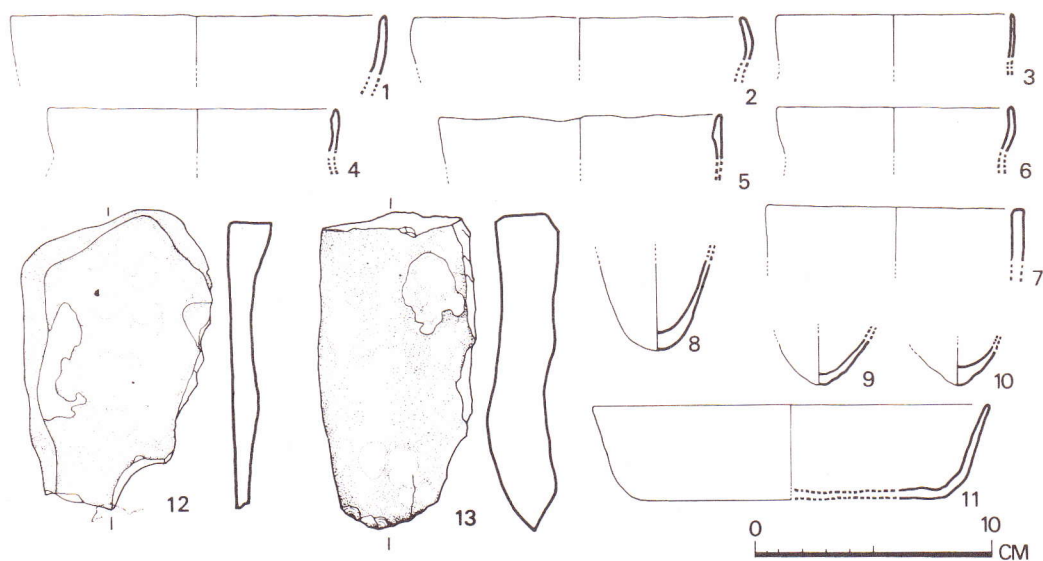


図21 平の谷遺跡出土遺物(1～10・製塩土器、11・須恵器)

このときの調査は、和歌山市教育委員会からの連絡をうけて、田中敬忠氏と共にあったものである。

大同寺の握り仏

南叡山大同寺、銅製蔵骨器で著名な大同寺に宝塔形の土塔・泥塔、俗に「握り仏」という一握り程度の泥土を焼きためたものが、古くから知られている。宝珠のあるものもないものがある。寺内一帯、本堂の西北にある経塚山からも出土する。

本堂の裏には、「握り仏」と呼ばれる小堂があつて、多くの握り仏がうす暗い格子の奥にのぞかれる。慈覚大師が当寺で如法経の修行をされた時、自ら泥を握りかためたことに始まると伝えられ、ために慈覚大師は八万四千の大日如来を拝せられたという。

平安時代の文献に「八万四千の泥塔を供養する」などみえて、起源は遠くインドにあり、泥に香灰を混ぜ六寸ばかりの泥塔をつくる風習から始まっているらしい。日本の平安時代以降の泥塔には、底に孔を穿ち真言を納入するものがあり、平面形は円形の宝塔形が多いというが、大同寺のものは平面が四角いものが多いようである。鎌倉時代のものであろう。

村民が病氣のとき、平癒祈願にこれを借りてかえり、平癒してお礼詣りにかえす習俗があるという。泥塔法・泥塔供ともいい、この法は滅罪・息災・延命のために泥塔を供養する。この法式が言わず語らず民間の習俗になじんだものであろう。高さは三・五センチ程度で、三種類ほどにわけられる。大型のものは、表に梵字（バン・大目）、裏に座仏・立仏のレリーフがあり、握り仏の名称がここからおこるらしい。以上、先学の所見によるところが大きい。



大同寺 握り仏（約7/10大）



大同寺 守札の版本

版 図



(1) 握仏 (約 $\frac{1}{2}$ 大)



(2) 握仏

昭和五十四年三月三十一日 発行

和歌山市文化財総合調査報告(2)

編集・発行者 和歌山市教育委員会

和歌山市七番丁2

印刷所 松田印刷